

カンボジアから世界を見る

学 校 名：長岡京市立長岡第三中学校
名 前：寺西 悠子（英語）
実践教科：道徳

指導時数：5 時間
対象学年：中学 2 年生
対象人数：240 人

1. 教師海外研修を通して感じたこと

あらためて、日本での生活はあたりまえではないんだと思った。多くのものを消費し、整然としたなか暮らしているのを実感した。

またカンボジアの背負った悲しい歴史に胸を痛めた。そして、これからへの希望を感じた。夢を語る学生、子どもたちがまぶしかった。その反面、日本は発展しきってしまったから、日本の子どもたちは夢を持ちにくいのかなとあらためて思った。日本の子どもたちにも世界のことを知ってほしい、知ってこれから生きていってほしいと強く思った。

2. カリキュラム

（1）実践の目的・背景

以前に生徒たちは驚くほど世界のことを知らず、そのことに衝撃を受けたことがあった。でも、日本で中学生が生活を送っていると世界のことを見聞きすることはほとんどなく、知らないのがあたりまえなのかもしれないと思った。世界中の人々が日本と同じような暮らしをしているわけではない、色々な文化があり、背景があることをとにかく知ってほしかった。知って、これから生きていってほしかった。

日本で毎日ふつうに勉強し、ふつうに部活動に取り組んでいる生徒たちがどうすればカンボジアという国に興味を持ち、「どうでもいいやん」とか「関係ないやん」と言わず、自分にも関係のあることとして考えられるかをすごく考えた。はじめにつながりを感じられるように日本の学生とカンボジアの学生の共通の活動として「大切なものを考える」を入れた。そのあとは、楽しめるところは楽しく活動させ、興味を持たせる、映像を活用するなどし、生徒たちが考えられるように工夫した。

（2）授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1 時限目 あなたの大切なものは？ ＊自分たちの大切なものを改めて考える。	●大切なものをブレインストーミングで書き出させる。 ●班で交流し、大切なもののランキングを作成させる。 ●自分の大切なものを絵で描かせ、それをカンボジアに持っていくことを伝える。	●ワークシート ●画用紙 ●色えんぴつ
2 時限目 カンボジアを知ろう！ ＊カンボジアに関する基礎知識を学び、異文化に触れる。	●カンボジアの地理的概要などを写真のスライドショーで視覚的に伝える。また、日本とのつながりを感じさせる。 ●衣食住などの文化をフォトランゲージ、モノランゲージを通して考え、知らせる。	●アジアの地図 ●写真（パワーポイント） ●カンボジアのモノ ●感想を書くプリント

- 映像「僕たちは世界を変えることができない」
- 感想を書くプリント

2 時限目：カンボジアを知ろう！

ねらい…カンボジアの文化を知り、興味を持たせる。

◆内容◆

- ① カンボジアの地理的なことなどを知る。
- ② スライドショーを見て、カンボジアのイメージを持つ。
- ③ フォトランゲージ、モノランゲージを通し、カンボジアの文化を考える。

— フォトランゲージに用いた写真 —



何をしているところ
でしょう？



家の下を隠して、
家の下はどうなっ
ているでしょう？



何に使うもの
でしょう？



何をしているところ
でしょう？

生徒の 感想

- ▶ カンボジアはテレビでよく紹介されていて、お金がなくてとても大変、かわいそうな国だと思っていたけど、日本と変わらない食べ物などが売られていてびっくりしました。子ども（若者）が多いことを初めて知ったし、トイレなどの水も節約していたので日本よりえらい国だなあと思いました。虫やカエルをたべるのは少しいやだなあと思いました。
- ▶ カンボジアはもっと貧しくて暗いところなのかと思っていたけど、みんな楽しそうだった。でも、子どもが働かないといけなのは、まだ貧しいところがあるのだなあと思った。日本もカンボジアも同じアジアの国なのに全然文化が違ってびっくりした。

◆所感◆

今までカンボジアという国についてあまり知らない生徒や、貧しい国だという印象だけを持っている生徒が多かった。授業を受けて、貧しいだけでない、日本と同じようなところもある、などそれぞれカンボジアについて新たな印象を持っていた。同じ授業を受けているのに、それぞれの生徒にそれぞれの受け止め方があり、興味深かった。

3 時限目：カンボジアの学校

ねらい…カンボジアの学校を知り、日本と同じところ・違うところを感じる。

カンボジアの学生の大切なものを知り、自分たちとの価値観の違いを感じる。

◆内容◆

- ① 班対抗でカンボジアの学校についてのクイズをする。
- ② カンボジアの学生の大切なものを予想する。
- ③ カンボジアの学生の大切なものを知り、自分たちの大切なものと同じところ・違うところを知り、価値観の違いを感じる。

●— カンボジアの学生の大切なもの —●



平和



家



勉強（学校）

生徒の感想

- ▶ ポルポト政権とかそういうカンボジアの悲しい歴史を何も知らなくて、もっと外国のいいところ悪いところも知らなければならなかった。
- ▶ カンボジアの子どもたちはすごく学校が好きで、どれだけ勉強が好きなのかよくわかった。日本の子どもはたいてい勉強が嫌いだけど、カンボジアの人にとって、学校があるのは素晴らしいことだとわかって、私たちは勉強についてぜいたくを言い過ぎだと今日の授業で振り返りました。

◆所感◆

班対抗のクイズ形式だったので、みんな積極的に参加していた。生徒たちはポルポト政権の話に触れたとき、カンボジアの学生の大切なものの絵を見せたときは、真剣なまなざしで話を聞いていた。

4 時限目：カンボジアの背負った悲しい歴史

ねらい…地雷について理解を深める。
世界の現状を知る。

◆内容◆

- ① 映像「ウルルン滞在記」を見て、地雷についてイメージをふくらませる。
- ② 地雷除去の現場を写真で見せ、理解を深める。また地雷の模型を見せ、イメージさせる。
- ③ アキ・ラーさんの人生に焦点を当て、戦争の残忍さを改めて感じる。
- ④ 世界の現状を紹介し、世界に目を向けさせる。

生徒の感想

- ▶ 地雷がカンボジアとか他の国にもあって、すごく悲しい気持ちになりました。地雷を撤去する人は自分の命がなくなるかもしれないのに、仕事をするのはすごいと思った。
- ▶ 地雷を戦争中に軍隊の兵士さんが埋めるのに、1番被害を受けているのは市民だと知ったときは驚いた。改めて地雷の怖さを知った。
- ▶ 僕はなんで子どもに銃や手りゅう弾などを持たせて戦争に行かなければならないのかわかりません。戦争などで被害にあった人は何の罪もないのに、死んでしまうのがあまりにもつらいことだと思いました。

◆所感◆

地雷が爆発する映像や、地雷の模型を見せ、アキラさんの実体験の文章を読ませたので、イメージはふくらみやすく、かなり印象に残る授業だったように思う。しかし、どうしても第三者的な立場で「早く地雷がなくなってほしい」というような感想を持つ生徒が多く、国際理解教育の難しさを改めて感じた。

5 時限目：カンボジアから世界を見て

ねらい…国際協力に目覚めた若者の映画を見て、自分たちにも何かできるということに気づかせる。
何をすることに意味があるか考えさせる。

◆内容◆

- ① 映画「僕たちは世界を変えることができない」を見る。
- ② 自分たちにできそうなことをいくつか提示し、そのなかどれが最も意味があるか考える。班で意見を交流し、発表する。以下のものを選択肢として提示した。
 - ア お金を集めて、学校を建てる。
 - イ カンボジアに行って、地雷の撤去を手伝う。
 - ウ 使わなくなったもの（鉛筆・ノート・本・けん盤ハーモニカ）などを集めて送る。
 - エ 地雷を撤去できるマシンを開発する。
 - オ 政治家に手紙を書いて、どうにかするように頼む。

カ カンボジアについてほかの人にも知ってもらおう。(知らせる)

キ カンボジアに行ってみる。

③ この学習全体をふり返っての感想を書く。

生徒の感想

- ▶ カンボジアには貧乏なイメージしかなかったけど、その貧乏にはわけがあることを知って、カンボジアのことを全然知らなかったので知れてよかった。カンボジアには悲しい出来事があったのを知って、同じ世界に住む私たちにできることをしようと思った。
- ▶ カンボジアでは色々大変なことがあるし、まわりにもそんな国はたくさんあるということがわかりました。勉強したくてもできない人だっているし、遊びたくても仕事の手伝いなどで遊べない子どもがいるということを知って、一生懸命に勉強も遊びもしないといけないと思った。
- ▶ 私はカンボジアの他にもこんな感じの国はいっぱいあると思う。だから他の国もことをもっと知ろうと思う。そして大人になってお金を貯めて、そこの国に行ってみたいと思う。

◆所感◆

はじめに見せた「僕たちは世界を変えることができない」がよかった。生徒たちは今まで学習してきたカンボジアを映像で目にして、見入っていた。トゥールスレン博物館やキリングフィールドの映像もあり、衝撃を受けていた。実話をもとにした映画だったので、大学生が学校を建てたという内容を紹介し、そこから自分たちにできることを考えさせたので、自分たちにひきつけて考えることができていた。「小さなことでも自分も何かできることをしたい」と思った生徒が多くいたことがうれしかった。

4. 成果と課題

すべての授業を終えたときに、「自分たちも何かしたい」「もっと世界のことを知りたい」と生徒たちが言ったことがうれしかった。「先生に何か押しつけられた」ではなく、自分に関係のあることとして考え、どうにかしたいと思えたことが素晴らしい。なので、私としては満足している。授業のなかでは、意外な生徒が興味を示したり、ふだんと違った生徒の表情を見ることができた。

課題は、「何かしてあげたい」と言った生徒が多かったこと。どうしても「してあげる」「助けてあげる」という感覚が残ってしまった。「協力する」という発想を持つのは難しいと実感した。しかし、初めてこんな世界のことを知ったのだからそういった感想を持つのも当たり前なのかもしれないとも思っている。今年度のみでの取組で終わらず、これから継続して国際理解教育をすることが大切だと考えている。そうするなかで、生徒たちの理解も私自身の理解も深まっていくと思う。

参考文献 「アキラの地雷博物館とこどもたち」アキ・ラー 編者 三省堂

参考 DVD 「世界ウルルン滞在記 カンボジア編」
「僕たちは世界を変えることができない」